

【資料紹介】大愚良寛筆 問答歌と齊藤伊右衛門宛て書状

塚田 博

はじめに

当館では、平成二九年度収蔵資料（教育用図書資料、年次報告書xi頁参照）として、標題にある大愚良寛（一七五八～一八三二）の墨蹟二点を新規に収蔵した。本稿ではその二点を紹介する。

大愚良寛（以下「良寛」と表記）といえは、「良寛さま」で親しまれ、清貧に甘んじ、子どもたちと手鞠をついて戯れる逸話などで、あまりにも有名な日本を代表する僧侶の一人である。その行状については数多の論述があり、研究史も膨大であることから、ここでは略年譜を記すのみで了承していただきたい。

宝暦八年（一七五八）一〇月二日（一歳）越後国出雲崎（現新潟県出雲崎町）の名主山本家（橘屋）に生まれる。幼名栄蔵。

安永四年（一七七五）（二八歳）曹洞宗光照寺（同町）の玄乗破了について出家。同八年（一七七九）（三二歳）光照寺に来錫した備中玉島の円通寺（現岡山県倉敷市）の大忍国仙（破了の師）に得度。国仙に随って円通寺に赴く。

寛政二年（一七九〇）（三三歳）国仙より印可証明を得る。

同三年（一七九一）（三四歳）国仙示寂。円通寺を離れ帰郷。

この間、諸国行脚。

同九年（一七九七）（四〇歳）この頃より、越後国上山の五合庵（現新潟県燕市）に住す。

文政元年（一八一八）（六一歳）国上山の乙子神社の境内に草案を構える。

同九年（一八二六）（六九歳）鳥崎村の木村家（現新潟県長岡市）に寓し、晩年を過ごす。

天保二年（一八三一）一月六日（七四歳）示寂。

良寛の生き様は、一宗一派を超越した感があり、曹洞宗の僧侶と呼ぶには憚られる場合もある。実際に墓所は浄土真宗の隆泉寺（現新潟県長岡市）である。しかしながら、良寛が出家・得度し、印可証明を得たのは曹洞宗の僧侶のものであることから、僧侶としての出身は曹洞宗であった。また自由闊達な境界の根底には、修行時代に身を投じた曹洞禅への求法と研鑽された学識があったといえよう。

一、問答歌【本書口絵1】

掛軸装／一幅／紙本墨書／本紙縦二四・五cm×横二三・〇cm

【翻刻】

（原文、変体仮名ママ）

良寛尊者の茂の書玉ハさるる

如意宝珠茂堂る飛ちりの恵満ねハ

茂堂ぬ耳似たる玉ニそ有今る

平明

（現代仮名遣い、適宜常用漢字に改む）

良寛尊者の物書き給わざるに、

如意宝珠、持たる聖の、恵まねば、

持たぬに似たる玉にぞ有りける

平明

閑礼こ礼東奈尔安

けつらむ餘能難可者

かれこれと、何

論（あげつらん）ん、世の中は、

悲東都み堂萬能閑

気登之羅敷天

.....  
ひとつ御霊(みたま)の、陰(かげ)と知らずと

【軸裏書き】

「良寛和尚墨跡 平明老人との問答歌

良寛和尚遺墨集所載 御風拝鑑印(印文「御風」)

【箱書き】

(表)「良寛和尚墨跡 平明老人との問答歌」

(裏)「良寛和尚遺墨集所載

平明老人姓平田氏出雲崎の人なり 御風拝鑑印(印文「御風」)

【掲載文献等】

本資料について、管見の限りの書籍等への掲載・出品経歴等を記す。

①『良寛和尚遺墨集』相馬御風編(春陽堂、大正八年)

②『良寛』安田鞞彦監修(筑摩書房、昭和三五年)

③『第二回 良寛和尚遺墨展』図録(万葉洞、昭和四六年、会期：昭和四六年六月一日～一日・於：万葉洞上野店)

④『良寛遺墨考』酒井千尋著(求龍堂、昭和四九年)

⑤「良寛の書」展(会期：昭和五〇年一月二九日～二月一日・於：致道博物館)

⑥『良寛墨蹟大観 第三卷 和歌篇(一)』加藤儔一・飯島太千代(中央公論美術出版、平成五年)

【内容】

本墨蹟は、厳密には前半の「良寛尊者の…」以下四行が平明の筆、後半の「閑礼こ礼東…」以下四行が良寛の筆となつて構成されている。

平明は良寛に何か書いて欲しいと頼んだが、一向に書いてくれなかつたようである。そこで平明は短歌でもつて催促した。それが「如意宝珠…」の短歌である。「如意宝珠を持っている聖(＝良寛)が、何も書き恵んでくださらないのは、宝珠を持っていないのに等しいことではないか」。

(三〇)

この皮肉めいた和歌に対する良寛の返歌が「閑礼こ礼東…」である。「あれこれと何を細かいことを言い立てているのだ。(あなたは)世の中は、たったひとつの御霊のお陰であることを知らないではないか」。

はかつたような料紙の使い方であり、平明はわざと料紙の右三分の一程度に書き付け、残りの余白に良寛が書くように仕向けたのである。良寛は平明の機転を察したように、余白に大胆に書き、「霊」と「珠」をかけて、これもまた機知に富んだ説法で応じたのであった。

【伝世など】

古くは相馬御風(一八八三～一九五〇)が編纂した掲載文献①に掲載され、同書には掲載番号七八として、「七八、平明老人との問答歌(鳥井儀資氏蔵)」と記されている。本資料の来歴に関するものが記されているのは本書のみである。軸裏書きと箱書きは、ともに御風の筆によるものであり、「良寛和尚遺墨集所載」と記していることから、①書が刊行された大正八年以降の筆と思われる。箱書き(裏)には、平明老人とは平田氏で出雲崎(良寛出生地)の人と記されている。良寛と平明の交流は詳らかではないが、この問答歌から、親しい間柄であったと推察できよう。

①書刊行当時に本墨蹟を所蔵していた鳥井家とは、良寛の生家橘屋が出雲崎の名主を務めていた時、町年寄りとして橘屋を支えた敦賀屋の末裔であった<sup>①</sup>。九代目と一〇代目が儀資を名乗っている。初代の儀資(鳥井家九代目)は、明治三三年(一九〇〇)に出雲崎町長に就任し、同三七年に出雲崎町と尼瀬町が合併し、新たな出雲崎町が新設された際にも引き続き出雲崎町長を務めた人物である<sup>②</sup>。

①書に見える儀資は二代目儀資(一八八三～一九五〇)の代である。彼は尼瀬の大谷家に生まれ、初め文四郎といった。熱心なキリスト教信者として知られている。明治四〇年に鳥井家の養子となり、大正元年に養父が没すると儀資を襲名した。昭和一九～二一年には出雲崎町長を務めた。またすぐれた良寛研究家であり、良寛についての見識や関係書籍の蒐集において、深い交流のあった相馬御風も一目おいた人物であったという<sup>③</sup>。奇しくも御風と生没年が同じである。

なお、③⑥は展示会出品に伴うものであり、過去に二度の出品が確認できる。

二、齊藤伊右衛門宛て書状【本書口絵2】

掛軸装／一幅／紙本墨書／本紙縦二一・三cm×横四七・九cm

【翻刻】

（原文、変体仮名ママ）

此間暑気甚候、如何  
御暮し遊候や、僧も老  
衰いたし万事に

ものうく候、このあひた

由之老より長サ五寸位のせと

掛花いけ便にもたせ

遣候、その形

（掛け花生けの図）

今のところ野僧には

不用、貴宅に御用被遊

可被下候、近中持参仕候、

秋者きの、花能散可利

も、数き尔け里、知きり

しこともまた

とけなく耳

八月十一日 良寛

齊藤老

【軸裏書き・箱書き】なし

（現代仮名遣い、適宜常用漢字に改む）

此の間暑気甚だしく候、如何

御暮し遊び候や、僧も老

衰いたし万事に

ものうく候、このあひた

由之老より長サ五寸位のせと

掛花いけ便りにもたせ

遣わし候、その形

（掛け花生けの図）

今のところ野僧には

不用、貴宅に御用遊ばされ

下さるべく候、近中持参仕り候、

秋萩の、花の盛り

も、過ぎにけり、契り

しことも、まだ

遂げなくに

【掲載文献等】

本資料についても、管見の限りの書籍等への掲載・出品経歴等を記す。

①『78日本書芸院展特別展 良寛』図録（社団法人日本書芸院、昭和五三年、会期：昭和五三年四月二〇日～二五日・於：大阪天満橋・松坂屋）

②『文人書譜6良寛』宮榮二著（淡交社、昭和五四年）

③『没後五十年 良寛展』図録（毎日新聞社、昭和五五年、会期：昭和五五年七月二十九日～九月二八日・於：東京三越美術館・大阪三越）

④『良寛の書簡集』谷川敏朗編（恒文社、昭和六三年）

⑤『良寛墨蹟大観 第五卷 書状篇』加藤儔一・飯島太千代（中央公論美術出版、平成四年）

【内容】

良寛は弟由之から、長さ五寸程度の瀬戸の掛け花生けをもらったが、不用なので近日中に持参すると伝えた内容。中央部にその掛け花生けの図を記すという珍しいものである。また文末に短歌を載せる。短歌には「秋萩の盛りの頃は過ぎてしまった。（その頃に訪問するという）約束はまだ果たしていない。」と記され、訪問できなかったことを詫びている。

宛て先の「齊藤老」は、伊右衛門（源右衛門とも）という。天保九年（一八三四）四月二三日、七六歳没。分水町中島（現新潟県燕市）の庄屋を務めていた。中島は良寛の住む五合庵に近く、種々の物を送っていたという（掲載文献②④を参照）。

「秋はぎの…」の歌は、文政十三年（一八三〇）八月一八日付けの貞心尼宛てと思われる書状にも記されている。本書状では、眼病を患った良寛が治療のために与板（現新潟県長岡市）まで行ったが、足が痛く腹痛がひどいため、福島（同市）の法弟・貞心尼の庵に訪問できない旨を述べている。そこから寺泊（同市）に行こうとしたが、地藏堂の中村家（現新潟県燕市）で臥せってしまい、この歌を添えて貞心尼に詫びたものである。

齊藤老宛ての書状は、この七日前の八月一日のものと考えられている（掲載文献②③④⑤）。したがって、中島の齊藤家にも訪問する予定だったが行けなくなっ

てしまったということであろう。

なお、この歌は、『蓮の露』(良寛と貞心尼の歌集、貞心尼編、天保六年序)にも、「あきはかならずおのが庵りをとふべし、とちぎりし給ひしが、こちれいならねば、しばしためらひてなど、御せうそ給はりける中に」の詞書を添えて収録されている。前々から貞心尼のもとを訪れる約束をしていたことがうかがえる。

良寛は同年七月より体調を崩し、七月六日に弟由之が良寛を見舞っている。書状で述べている由之からもらった掛け花生けとはこの時のものであるか。この後、良寛の病状は悪化し、同年二月二十五日(二月一〇日に天保改元)に危篤に陥り、翌天保二年正月六日、七四歳の生涯を閉じた。本書は良寛晩年の心情が吐露されている一書である。

### 【伝世など】

齊藤伊右衛門宛ての良寛書状は、谷川敏朗編『良寛書簡集』(野島出版、昭和四八年)には七通が収録され、本書は掲載されていない。本書は掲載文献①を初見としているので、『良寛書簡集』から①書までの間の新出資料である。谷川氏が後年増補した④書には、先の七通に加えて八通目として収録されている。

また②書には「この書簡を数年前富山で拝見し、良寛記念館に出品したが、短歌は、渡辺秀英氏『良寛歌集』(昭和五四年)に採録されているが、書簡はまだ全集に未採録である。」と記されている。「富山で拝見」とある以外は不明であるが、昭和五〇年前後の新出資料であることが推測できる。

### おわりに

本学では、文部科学省補助事業「平成二八年度私立大学研究ブランディング事業」の選定を受け、駒澤大学のブランド(独自色)の一つとして、『禪と心』研究の学際的国際的拠点づくり(禅ブランディング事業)を進めている。当館もその一翼を担うひとつとして、広く国内外に向けて発信することのできる資料の収集に方針を定め、今年度は良寛の遺墨を収蔵する機縁に至った。

良寛は、国内外において広く愛好されている。今年度は、和歌と書状の二種を収

蔵したが、今後も漢詩・仏語など多彩な良寛遺墨や、中世の禅関係資料などの稀覯資料を積極的に収集することを計画している。また資料収集とあわせて、禅ブランディング事業を通じた調査・研究活動を行うと同時に、今後の当館収蔵品の核として良寛資料の充実を図り、将来的に良寛遺墨展の開催を視野に入れている。本年度の良寛墨蹟二点の収集は、その第一歩として意義のあるものと思われる。

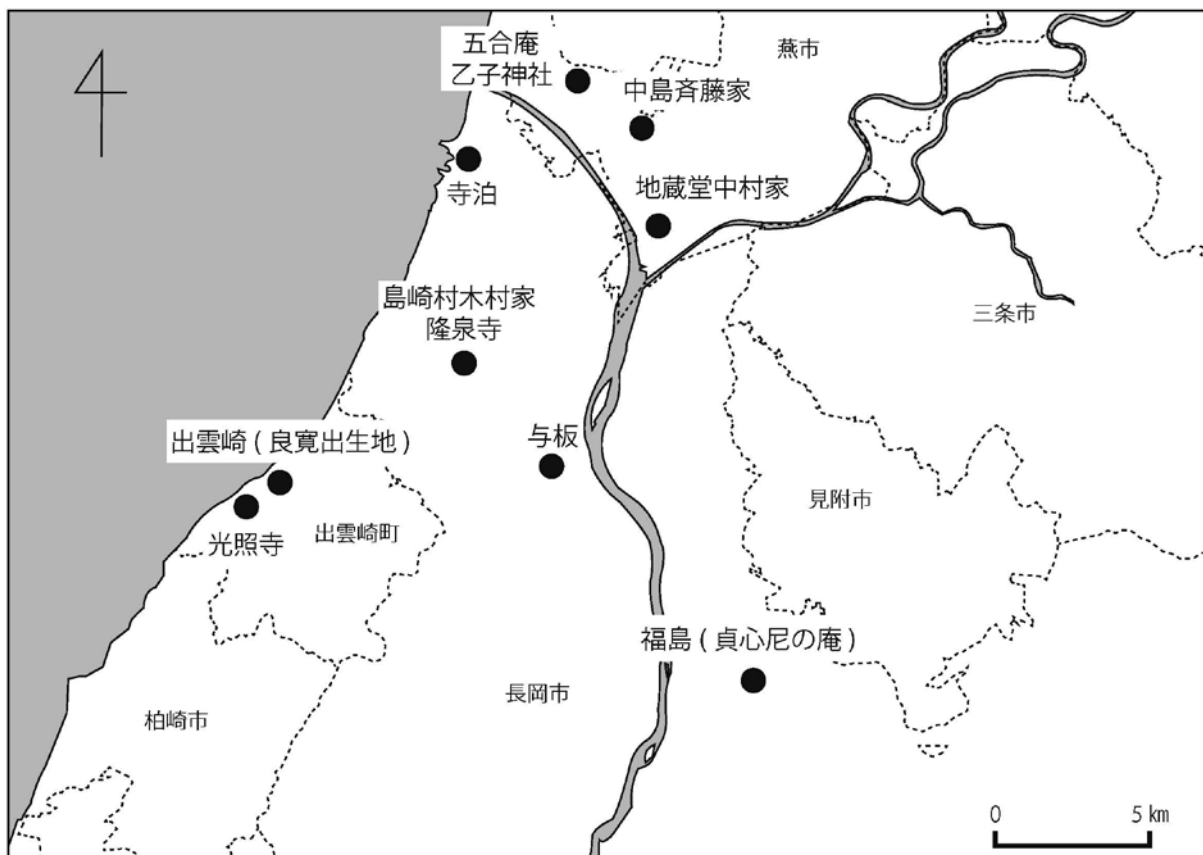
### 註

- (1) 糸魚川市歴史民俗資料館《相馬御風記念館》だより「古今一如」第一号、平成一九年三月、糸魚川市歴史民俗資料館、「平成一八年度企画展 良寛さまと相馬御風」。
- (2) 『出雲崎町史』資料編Ⅲ近代・現代(平成元年一〇月)二四六頁、「同」通史編下巻(平成五年三月)九三頁等を参照。
- (3) 二代目儀資については、鈴木孝二「日本キリスト教史夜話 二代目鳥井儀資の生涯と信仰」(『敬和』第一〇五号、昭和五二年九月一日号、敬和学園高等学校発行)等を参照した。また良寛記念館(出雲崎町)館長永寶卓氏に御教示を賜った。
- (4) 掲載文献④⑤および、小島正芳「良寛墨蹟鑑賞(一) 貞心尼宛書簡 先日は眼病の療治」(『全国良寛会会報』良寛だより)一五三号、平成二八年一〇月。翻刻文は次の通り。先日は眼病のりやうじがてらに与板へ参候、そのうへ足たゆく、腸いたみ、御草庵もとむらはずなり候、寺泊の方へ行かん(と脱力)おもひ、地藏堂中村氏に宿りいまにふせり、また寺泊へもゆかず候、ちぎりにたがひ候事、大目に御らふじたまはるべく候、
- (秋はぎの…)の歌
- 御状ハ地藏堂中村二而被見致候、
- 八月一日
- 良寛
- (5) 『続曹洞宗全書』法語・歌頌、八八七頁。またこの頃の良寛の動向については、小島正芳「はちすの露」を深く読む 五、良寛と貞心尼 最晩年の交流」(『全国良寛会会報』良寛だより)平成二八年四月)を参照した。

(謝意) 本稿執筆に当たっては、良寛記念館(新潟県出雲崎町)館長永寶卓様に、関連文献等諸資料の御教示を賜りました。ここに改めて御礼申し上げ、謝意にかえ

させていただきます。

（つかだひろし 駒澤大学禅文化歴史博物館学芸員）



本稿に関連した良寛関連地図 松浦誠氏（本学大学院人文科学研究科地理学専攻）調整